

防除の徹底と実肥の施用について

○赤かび病防除の徹底

小麦(「びわほなみ」以外)は開花始め～開花期に、「びわほなみ」および「ファイバースノウ」は開花始め～開花期とその7日～10日後頃に農薬を散布しましょう。赤かび病の発病粒はかび毒が含まれている可能性があり、食用や飼料にすると中毒症状を起こすことがあります。

表1 品種ごとの開花日予想(上段:品種、下段:予想開花日)

農林61号 10/25～11/10 播種	びわほなみ 11/10～11/20 播種	ミナミノカオリ 11/1～11/10 播種	シロガネコムギ 10/25～11/10 播種	ファイバースノウ 10/25～11/10 播種
4/13～17	4/18～22	4/8～12	4/8～12	4/16～20

※播種時期や地域によって生育に差があります。自分のほ場の麦の出穂、開花状況を確認して、対応しましょう。

○実肥の施用

小麦では、タンパク質の含有量を高め、製粉・製麺適性を向上させるために出穂後10日に実肥を施用しましょう。特にパン用小麦の「ミナミノカオリ」では高いタンパク質含有量を求められているので、各地域の栽培暦を参考に必ず適期に必要な量を施用しましょう。

○排水対策

排水不良により湿害が発生すると収量・品質の低下を招きます。排水ができているか、ほ場を点検し、滞水している場合は溝さらえ等を行い、速やかに排水しましょう。



排水不良の原因になるので溝さらえを行いましょう

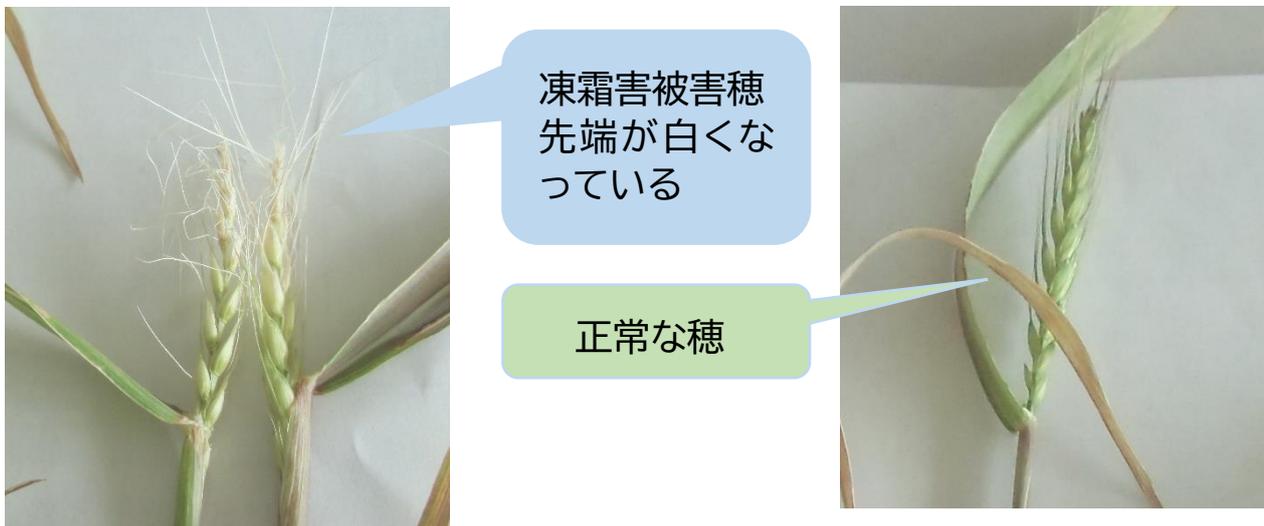
○凍霜害について

とうそうがい

凍霜害とは…麦は通常、冬期は寒さへの抵抗力を持っていますが、暖かくなり、生育が進むと寒さへの抵抗力が弱くなります。その時期に低温にさらされると**幼穂異常**や**不稔障害**を起こします。これを「凍霜害」といいます。

表2 凍霜害の発生条件

幼穂異常	小麦	幼穂3mm以上 (最危険期5~10mm)	最低気温-2℃以下で幼穂凍死発生
		幼穂20mm以上	最低気温0℃以下で小穂凍死発生
	大麦	幼穂長7~30mmで幼穂凍死の危険高まる。	
不稔障害	減数分裂期	出穂前8~10日の時期に-1~-1.5℃の低温を3~4時間受けると花粉異常による不稔発生の危険が高まる。	
	出穂期 (~開花期)	出穂期(~開花期)に0℃近い低温により、不受精となり、不稔発生が起こる。	



2月は平年より気温が高く、生育が進んだ半面、3月には最低気温が氷点下になった日が5日ありました。(大津アメダス)

凍霜害とみられる穂を見つけた場合は近くのJAか大津・南部農業指導普及センターへ相談してください。